

養母は、かし子の弱々しいからだを心配するあまり、いろいろな気を使うのですが、かし子にはその気持ちを通じません。自分の親切が相手にわかってもらえず、養母は困りはててしまいます。二人の間は、だんだんと気まじくなり、かし子は、無口で気がむずかしい少女に育っていききました。

養母は、かし子を『キダーさんの学校』にあずけました。そのころの横浜には、アメリカから来たキリスト教の牧師さんが、数人の日本人を生徒として、主に英語を教えてくれるところがいくつかありました。『キダーさんの学校』もその一つでした。

しかし、かし子は、そこでもあまり勉強しません。養母は、かし子に女中をつけて、その女中も勉強しながらかし子をはげますのですが、かし子にとつては、それがまたわずらわしかったのです。

かし子は、ひとりになりたかった、広々としたところがほしかった、あの会